

「フォッセ・アルデアティーネ」をめぐる問題 ドイツ軍によるイタリア民間人虐殺事件をどのように記憶するか

小田原 琳

目次

はじめに 「フォッセ・アルデアティーネ」とは

1. 事件についての語り

(1) ドイツ軍のコミュニケ

(2) 事件翌々日のヴァティカン機関紙

(3) 2007年8月7日「ラ・レプブリカ」紙

(4) フォッセ・アルデアティーネに関する研究

2. 犠牲者たち

(1) フォッセ・アルデアティーネ事件の経過

(2) 犠牲者たち

3. 記念碑、記念すること

(1) 追悼施設の建設

(2) 死者を記念する

4. 語りを混乱させるもの

(1) 事件の理解の問題点

(2) なぜ「理由」が必要なのか

おわりに

はじめに 「フォッセ・アルデアティーネ」とは

1944年3月24日、ローマ市郊外の洞窟フォッセ・アルデアティーネで、ローマ市民335人が、イタリア半島北部を占領中のドイツ軍に連行され、殺害された。処刑の終了後、ドイツ軍は洞窟の入口を爆破して、事件を隠蔽しようとした。

イタリアはその前年1943年7月、ファシスト内の反ムッソリーニ派によるクーデターによってムッソリーニが失脚し、国王の命によってバドリオを首班とする内閣が組閣されていた。この政権は、同年9月に連合軍との休戦協定を発表し、同時に国王とともに、首都ローマを放棄して、連合軍支配下の南部に逃亡した（ムッソリーニはクーデターにともない監禁されていたが、ドイツ軍に救出され、ガルダ湖畔のサロに、イタリア社会共和国を樹立した）。バドリオ政権は10月には、ドイツに対して宣戦布告している（連合国軍の共同参戦国という扱いであった）。これに対してドイツ軍はナポリ近郊のサレルノ以北を支配下におき、市民の安全を防衛するもののない「無防備都市」となったローマも、実質的にはドイツ軍によって支配された。この占領状態に対して、レジスタンス運動やサボタージュなどで、組織的に、あるいは日常生活のなかで、抵抗が行なわれていた。「フォッセ・アルデアティーネの虐殺」はこうした状況下で起こった事件である。

しかしこの深刻な事件が、歴史的に言及されることは意外に少ない。イタリアにおけるユダヤ人の苦難の足跡をたどったエッセイのなかで、

河島英昭はこの事件に触れて、それを、「事件の重要性が軽視されているためではなく、襲撃と虐殺の絡まりあった事件の核心に、歴史化しにくい「テロリズム」が蟠っているからであろう」¹と記した。たとえば、フランスにおいて刊行されたピエール・ノラ編『記憶の場』プロジェクトに触発されて、イタリアでも、1996年から97年にかけて、イタリア版『記憶の場所』が編まれ、出版されたが²、今日のイタリアのアイデンティティを構成する多様な「国民的記憶」を扱った同書では、この事件は触れられていない。後述するように、イタリア版『記憶の場所』を編む動機となった状況——イタリアにおける歴史修正主義に対する批判——は、今日フォッセ・アルデアティーネをめぐる議論がおかれている状況と、同様であるにもかかわらず。フォッセ・アルデアティーネはなぜ、「国民的記憶」として記憶されることが困難なのだろうか。本論では、この、主権者すら曖昧な「例外状態」で起こった事件と、事件後に展開されたそれをめぐる議論を紹介し、この出来事を歴史化することの困難さの意味を考察したい。

1. 事件についての語り

(1) ドイツ軍のコミュニケ

フォッセ・アルデアティーネにおける虐殺が実

行された翌3月25日、ドイツ軍司令部の、3月24日22時55分発表のコミュニケが、ローマで発行されている新聞に掲載された。

1944年3月23日午後、ラゼッラ通りを通過中のドイツ軍警察部隊に、犯罪分子が爆弾攻撃をしかけた。この待ち伏せの結果、32名のドイツ軍警察隊員が死亡、多数が負傷した。

この卑劣な待ち伏せは、バドリヨ派の共産主義者たちによって実行された。この犯罪がどの程度まで英米の扇動によるものか明らかにするため、現在調査が続けられている。

ドイツ軍司令部は、この邪悪な悪党どもの活動を鎮圧することを決意した。イタリアとドイツの新たに宣言された協力関係を、処罰を受けることなく妨害することは、何人たりとも許されない。ゆえに、ドイツ軍司令部は、殺害されたドイツ兵1名につき、10名の共産主義者＝バドリヨ派を銃殺することを命令した。この命令はすでに遂行された。(強調筆者)

文中にある、「ラゼッラ通り」における「犯罪分子」による「攻撃」とは、フォッセ・アルデアティーネにおける虐殺の前日、3月23日15時45分に起こった、レジスタンスによるドイツ軍に対する攻撃である。ローマ市中心部に位置す

¹ 河島英昭『イタリア・ユダヤ人の風景』岩波書店、2004年、149ページ。

² Mario Isnenghi (a cura di), *I luoghi della memoria*. 3 vol., Roma-Bari, Laterza, 1996-97.

るラゼッラ通りにおけるこの攻撃は、イタリアでレジスタンス活動を行っていたさまざまなグループのひとつである GAP (Gruppi di Azione Patriottica, 愛国行動グループ。共産党勢力を中心に構成されていた) の一ユニットによって遂行された。アメリカ人ジャーナリストで、この襲撃について 1967 年に初めてその実態を描き出したロバート・カッツによれば³、移動して行く SS 隊員の列を、パルチザンたちは手押し車に爆弾を積んで待ち、見張りによる合図を受けて点火した。そして、手榴弾や拳銃等で攻撃しながら、全員無傷で撤退した。カルラ・カッポリーニ、ロザリオ・ベンティヴェーニャ、フランコ・カラマンドレーイ、カルロ・サリナーリ、グリエルモ・ブラージというパルチザンたちが、この攻撃の実行を担っていた。

ローマに置かれたドイツ軍司令部は、ヒトラーと連絡をとりつつ、「殺害されたドイツ兵 1 名につき、10 名の共産主義者＝バドリヨ派を銃殺すること」を決定し、その命令は、「すでに遂行された」。これが、フォッセ・アルデアティーネにおける虐殺に関するドイツ軍の説明であった。つまり、フォッセ・アルデアティーネで虐殺された 335 名は、後述するように、攻撃とは直接的にはまったく無関係であったにもかかわらず、「報復」として殺害されたのであった。しかし、直接的には無関係であっても、間接的に

は、死をもってその罪をあがなわなければならぬと、ドイツ軍は考えたのだろう。先に述べたように、このときイタリアは、すでにドイツの敵国となっていた。このコミュニケのなかで、ムッソリーニから政権を奪取した「バドリヨ派」は、ファシズムがもっとも激しく敵視したもののひとつである「共産主義者」と併記されている。このとき、イタリア人全体が、総体として、ドイツの敵であったのである。この報復は 24 時間以内に決行するように決定され⁴、そのおりに遂行された。32 名のドイツ側死者に対し、「報復」の犠牲者は、混乱のなか、335 名であった。

(2) 事件翌々日のヴァティカン機関紙

3 月 26 日、ヴァティカンの機関紙『オッセルヴァトーレ・ロマーノ』は、事件について次のように述べた。

このような事実の前では、あらゆる誠実な魂が、人道と、キリスト教精神の名のもとに深く痛むであろう。一方に 32 名の犠牲者。もう一方に、逮捕を逃れた罪人のために犠牲になった 320 人……

争いを超えて……我々は呼びかけよう。無責任な人々には、彼らが犠牲にする権利のない人命に対する敬意をもつように。無辜の人々への敬意を。彼らは不運な犠牲者

³ Robert Katz, *Morte a Roma*, Milano, Gruppo editoriale il Saggiatore Sp.A., 2004[Roma, Editori Riuniti, 1967].

⁴ Ibid., p.96.

である。責任ある人々には、彼らが自分たち自身に対して、彼らが守ろうとしている命に対して、歴史と文明に対してもつ責任を意識するように⁵。(強調筆者)

占領軍側の32名の死者と、占領軍に対する攻撃の「報復」として殺害された人々320名(実際には335名であったが、ドイツ軍の発表にしたがえば、320名であるべきであった)とが、どちらも「犠牲者」として同列に並べられている。そして、この虐殺の責任は、はっきりと、レジスタンス＝「無責任な人々」に帰されている。「責任ある人々」＝ドイツ軍には、歴史と文明に対する責任は要求されるが、「不運な犠牲者」320名の死の責任は問われていない。「人命」に対する公平性をたもっているように見える言辞には、1929年に、ムッソリーニのファシスト党と妥協することによってみずからの地位を保全したローマ・カトリック特有の、調停主義的なレトリックを見ることもできる。

しかし、注意を喚起したいのは、ドイツ軍のコミュニケ同様に、ここでも、ラゼッラ通りの攻撃と、フォッセ・アルデアティーネにおける虐殺とが、「原因」と「結果」として関連づけて語られているということである。ドイツ軍は確かに、フォッセ・アルデアティーネの虐殺を、レジスタンスによるラゼッラ通りの襲撃に対す

る「報復」と位置づけ、その語りは、事件の傍観者であったヴァチカンにも受け入れられていた。

けれども実際に、フォッセ・アルデアティーネの犠牲者たちの死の責任を、バルチザンたちに対して問うことができるだろうか？この問題が、今日に至ってなお——あるいは今日なお一層——、議論を巻き起こしている。60年以上前の事件をめぐる、新聞には記事が書かれ、裁判が起こされ、新しい研究が出版されている。そこには、戦争(の死者)をめぐる記憶を核とする、イタリアの歴史的自己認識の形成の変遷が反映している。

(3) 2007年8月7日「ラ・レプブリカ」紙
次に、昨年8月の中道左派系全国紙「ラ・レプブリカ」紙の記事を、長くなるが引用したい。

ローマ—1996年、「イル・ジョルナーレ」紙は、ラゼッラ通りの行動が、33名の死者をもたらし、SSによるフォッセ・アルデアティーネでの報復を発生させたとし、これを遂行したバルチザンを攻撃するキャンペーンを突然開始した。グループのメンバーに、335名の死者を招いた虐殺の責任を実質上負わせる記事であった。しかし本日、破毀院〔最高裁判所。控訴院の判決を差し戻す権限をもつ裁判所〕はGAPメンバーとこれを率いたロザリオ・ベンティヴェー

⁵ Alessandro Portelli, *L'ordine è già stato eseguito*. Roma, Donzelli, 2005[1999, 2001], p.4より引用。

ニャに対する名誉毀損に関する損害賠償
(45,000 ユーロ)について有罪判決を下し、
同紙のキャンペーンを否定して、その虚偽
性を強調し、パオロ・ベルルスコーニの日
刊紙を非難した。

破毀院はまず、事実関係から始めた。SS
ボーツェン大隊のドイツ兵に対する企て
は、「占領軍に対して行われた、軍人のみ
を標的とする正当な戦争行為であった」。
軍人とは、「イル・ジョルナーレ」紙が主張
するような「武装していない老軍人」では
なく、「26 歳から 43 歳の、6 発の爆弾とピ
ストルを装備した、完全武装の人々」であ
った。

また、ボーツェン大隊が「すべてイタリ
ア市民から構成されていた」というのも真
実ではないと判事たちは続ける。「ドイツ
軍の一部で、その構成員は、ドイツ市民権
を選択したアルト・アーディジェ住民であ
った⁶」。

破毀院は、この行為による民間人の死者
の数の問題にもこだわった。「イル・ジョル
ナーレ」によれば 7 人であった。しかしそ
うではなかった。「民間人の死者は 2 名で

あったことについてこれ以上議論の余地
はない⁷」。同様に、ラゼツァ通りの事件後
に、報復を避けるために降伏するように犯
人たちに対して勧告する声明が掲示され
たというのも真実ではない。これは、いく
つかの修正主義的な歴史叙述によって議
論された点である。破毀院はこれを事実によ
って否定した。「この主張は、フォッセ・
アルデアティーネの報復は事件の 21 時間
後に開始され、人民文化省〔ファシズム期
の省庁で、主に出版物の統制を行った〕の
指示により、ラゼツァ通りのニュースは秘
密にされ、報復が完了した後に公表された
という事実によって否定される」と判事た
ちは述べた。

上級判事の見解では、「真実に一致しな
いこれらの事実は、周辺的な性格のことが
らとは考えられない」。ミラノの控訴院が
「あの企てを選択したこと、それを実行し
た組織、その目的に関する厳しい批判」が
表現されることを認めたとしても、それだ
けでは、虚偽や誤りを積み上げることの根
拠にはならない。

このため、当時の同紙編集長ヴィットー
リオ・フェルトリが敢えて行った「ラゼツ
ァ通りの事件に言及し、エーリッヒ・プ
リブケとベンティヴェーニャの間に相似
性を見出すような、昨今のパルチザンとナ

⁶ イタリア最北部、南チロルに位置する自治州（ボルツァーノ・アルト・アーディジェ）。ラゼツァ通りで襲撃を受けた大隊の名称になっているボーツェンは、この地域のドイツ語名。ドイツ語・イタリア語・ラディーノ語の混在地域で、第一次大戦後、ハプスブルクからイタリア領となった。1939 年、ナチ党とファシスト党の体制間の合意により、南チロル住民は、イタリア領内に留まって「イタリア化」を受け入れるか、ドイツ語・ドイツ文化を守るために、第三帝国領内に移住するかを選択を迫られることになった。43 年にドイツはアルト・アーディジェを占領、現地の青年を軍ヘリクルートした。

⁷ 13 歳と 48 歳の市民が巻き添えになった。

チ黨員を同等に扱うという周縁的ではな
い言論状況が、真実に一致していないとい
うこと」は、ベンティヴェーニャの「個人
的・政治的尊厳を傷つけた」と考えられる。

ベンティヴェーニャのコメント：これは
イタリアの軍事・刑法・民事等の高等裁判
所による、私たちがその動機において正し
かったことを認める四度目の判決⁸です。し
かし世界には愚か者や党派的な人間があ
ふれており、まだ反対の側を支持する者も
います。どうしようもない……。 (強調筆
者)

この記事は、今日、フォッセ・アルデアティー
ネの事件が置かれている混沌とした状況を的確
に表している。

ラゼッラ通りの襲撃を遂行した GAP メンバ
ーに対して、フォッセ・アルデアティーネの責任
を問うキャンペーンを張った新聞「イル・ジョ
ルナーレ」は、文中にあるように、パオロ・ベ
ルルスコーニが所有する。彼は、1994 年、2001
～2006 年に首相を務めた、シルヴィオ・ベルル
スコーニの弟である。右派政党の党首で、首相
まで務めた人物の関係者が、レジスタンスの行
為に対して異議を唱える。これは、90 年代のイ

タリアの政治的变化と、それと同時に起こった
イタリア国民の歴史についての歴史解釈の問題
を、典型的に表す出来事であると言えるだろう。

まずは戦後から 90 年代までのイタリア政治
の変化をごく簡単に整理しておきたい。1943 年
7 月のクーデターによってファシスト体制が実
質的に崩壊すると、共産党、社会党、キリスト
教民主党、自由党、労働民主党、行動党からな
る国民解放委員会を基盤とした挙国連合政府が
構成され、以後のレジスタンス運動（とくにド
イツ軍占領下におかれた北部の）を指導した。

これによって、国民解放委員会は政治的正統性
を獲得し、このときの構成諸政党が、戦後 40
年以上にわたって、イタリア政治のなかで大き
な位置を占めてきた。ファシズムとの戦いの歴
史的経緯により、イタリアの戦後の国民アイデ
ンティティは、公式に、レジスタンスによる自
力解放という自己認識に基づいて構築されてき
たのである。

90 年代、これらの伝統的に力をもってきた諸
政党は没落・解体し、シャッフルされて新たな
多数の政治団体が誕生する一方、北部地域の利
益擁護を主張する北部同盟や、前出ベルルスコ
ーニが党首であるフォルツァ・イタリアといっ
た右派政党が台頭してきた。この変化の直接的
な原因は、既成政党の大規模な汚職事件に関す
る捜査が進んだことである。それによって、戦
後政治の中心的な政党であったキリスト教民主
党と社会党は大きな打撃を受けた。また冷戦の

⁸ レジスタンスの責任に関しては、1950、54、57 年の 3 回にわたって一部の遺族の訴えによる裁判が行われ、いずれも無罪となった。Portelli, op.cit., p.6. ラゼッラ通りの襲撃を実行したカッポーニ、ベンティヴェーニャ、カラマンドレーイには戦後共和国政府からレジスタンス勲章が贈られた（カッポーニは金、他の 2 名は銀）。Katz, op.cit., p.215.

終結にともない左右の対立軸それ自体が無効化されたことも、共産党（左翼民主党と共産主義再建党へと再構成）の動揺、共産主義の防波堤としてのキリスト教民主党の凋落、極右政党の躍進等の、劇的な変化の大きな要因となった。シルヴィオ・ベルルスコーニは民放テレビ局 3 局や流通・建設業を傘下にもつ企業グループの会長で、政界進出に際して結成した政党フォルツァ・イタリアの政治運動には、所有する企業の従業員やメディアが活用された。94 年に初めて首相になったときには、北部同盟と、大戦直後に旧ファシスト体制支持者によって結成されたイタリア社会運動の後継政党国民同盟と共闘して、中道右派連合「自由の極」を結成し、選挙に勝利した⁹。上記の新聞記事で言及されている「イル・ジョルナーレ」紙による反レジスタンスキャンペーンは、フォッセ・アルデアティーネの名を借りた、旧体制の正統性を保証しつつけてきたレジスタンス神話への攻撃の一環であったのである。

こうした政治的変化は、歴史叙述におけるファシズムの再検討を、なかでも修正主義的な議論を噴出させた。ファシズムが、同時代の社会において保持していた「合意」については、すでに 70 年代から、ファシズム研究の第一人者であったレンツォ・デ＝フェリーチェが指摘し、ファシズムとそれ以前の体制との連続性につい

ても実証研究が重ねられている¹⁰。90 年代の修正主義論争の特徴は、イタリア人のアイデンティティの「分裂」の契機として、レジスタンスとファシストの関係を、一方による他方からの解放の戦いではなく、対等な二つの「マイノリティ」の闘争と積極的に見なしたところにある。このような見解に基づいて、修正主義論者たちは、レジスタンス運動を「内戦」と呼んだ。彼らによれば、レジスタンスは少数の人々の事件に過ぎず、大多数の者はファシズムでも反ファシズムでもない「グレーゾーン」にとどまっていた。「レジスタンスを基盤とする共和国」という「神話」は、レジスタンスを正統性の根拠として戦後政治を支配してきたふたつの勢力、すなわち共産主義者とカトリックによってつくられた、「通俗的レジスタンス史学」とされる¹¹。先の「ラ・レップブリカ」紙の引用中で、「修正

¹⁰ 90 年代の修正主義論争の爆発にいたる議論の蓄積については、秦景寺友紀「イタリア修正主義論争の構造——ネーションをめぐる相克」『現代社会理論研究』第 15 号、2005 年所収を参照のこと。

¹¹ Renzo De Felice, *Rosso e nero*. Milano, Baldini e Castoldi, 1995. デ＝フェリーチェのファシズム論の特徴は、反ファシズムの立場からファシズムを考察するのではなく、ファシズムと反ファシズムの対立軸を超えた脱ファシズムの立場をとることを表明していること、その一方で、ファシズム関係者の資料を大幅に利用し、ムッソリーニに関しては一貫して、「真の」ファシズム＝啓蒙的な左翼全体主義を追求した人物として描いていることである。北原敦「イタリア現代史研究」岩波書店、2002 年、412 ページ。村上信一郎「知識人と政治」馬場・岡沢編『イタリアの政治』早稲田大学出版部、1999 年、214～215 ページ。レジスタンスを「民族的アイデンティティ」の崩壊、「内戦」と見る議論は、デ＝フェリーチェのほか、Claudio Pavone, *Una guerra civile*. Torino, Bollati Boringhieri, 1991; Ernesto Galli Della Loggia, *La morte della patria*. Roma-Bari, Laterza, 1996 などがある。ただし前者クラウド・パヴォーネの『内戦』（1991 年）については、膨大な史料にもとづいて混乱の時代に若者や知識人、多くの男女がどのような選択をおこなったか（あるいは選択をしなかったか）、ファシスト政権下のイタリア社会主義共和国（サロ共和国）とレジスタンスの間の戦い、それぞれの陣営内部の抗争を調査した仕事ぶりに対して、一定の評価がなされている。Mario Isnenghi, 'Recensione' in *L'Indice*, 1991, n.9.

⁹ 池谷知明「政党と政党制」馬場康雄・岡沢憲英編『イタリアの政治』早稲田大学出版部、1999 年、136～154 ページ。

主義的な歴史叙述「昨今のバルチザンとナチ党员を同等に扱うという周縁的ではない言論状況」とは、このような政治と歴史研究における状況を指している。

(4) フォッセ・アルデアティーネに関する研究

このような歴史叙述の状況に対する研究上の論駁も、同様に数多く行われている。先に挙げた『記憶の場所』の編集意図も、ファシズムについての「忘却と和解」——歴史修正主義の特質のひとつである「出来事の陳腐化」と言い換えることもできるだろう¹²——への対抗として、19世紀から20世紀にかけてのイタリアの統合の過程を特徴づける「歴史の複数性」に注意を払い、「抗争の歴史と記憶をつくろうとすること」にあった¹³。2006年に日本でも翻訳が出版されたセルジョ・ルツァット『反ファシズムの危機』も、このような状況に対する真摯な警告の書といえる。著者は、反レジスタンス・反共産主義的な修正主義の論調を厳しく批判するだけでなく、修正主義が提起しつづけるファシスト対レジスタンスの闘争という閉じた議論の円環から抜け出すために、戦闘の直接の担い手ではなかった民間人の死の検証へと向かいつつ

ある「最良の歴史叙述」すら、反ファシズムの危機的状況に力を貸している可能性がある指摘する。レジスタンスの大義のために戦って死んだ「英雄たちの記念碑化」にかかわって民間人の「犠牲者たちの記念碑化」が行なわれ、市民こそ「敵対する危険なふたつのイデオロギーの生贄の小羊であると認識された瞬間から」、犠牲者同士を区別すること自体が、還元主義的に無効化されてしまうからである。「記念碑化」することは、死者のアイデンティティと、その死の理由を確定して、ひとつに定めることをつねにともなう。けれども、とりわけ43年9月8日から45年4月25日までのイタリアの状況について、そうした画一的な解釈を行うことは、以下でフォッセ・アルデアティーネ事件についても検証するように、不可能なことである。人種法（1939年制定）によって大学での職を追放されたユダヤ人の孫であり、ユダヤ人とのハーフであることを隠してようやくアウシュヴィッツ行きを逃れた父親をもつルツァットが、「イタリア系ユダヤ人を「犠牲者として扱う」最近の動向が、それ自体で反ファシズムの危機に資するところがあったのではないかと述べて、そうした動向が、「ムッソリーニの独裁という史実全体」を「ユダヤ人迫害」という単一の次元に還元してしまう効果を生んでしまう可能性を指摘するということ自体が、彼がここで提起した問題の深刻な複雑さを示している¹⁴。

¹² 岩崎稔、シュテフィ・リヒター「歴史修正主義——九〇年代以降の位相」『岩波講座アジア・太平洋戦争1 なぜ、いまアジア太平洋戦争か』岩波書店、2005年、364～371ページ。

¹³ Mario Isnenghi, 'Conclusione' in *I luoghi della memoria. 3. Simboli e miti nell'Italia unita*, 1997, pp.522-523（この「結論」は同じものが『記憶の場所』全三巻すべてに付されている。ここでは第三巻のページを示す。）、しかしある意味では、イズネンギも「イタリア国民」のアイデンティティという、同じ土俵で議論しているとも言える。

¹⁴ Sergio Luzzatto, *La crisi dell'antifascismo*, Torino, Einaudi, 2004,

フォッセ・アルデアティーネ事件についての研究も、今日まさにこうした状況に置かれている。虐殺事件自体の解明は、ローマ解放後すぐに行われた。44年6月4日にアメリカ軍がローマに到着すると、アメリカ軍によって、虐殺を調査し、現場を発掘して遺体を同定するための真相究明委員会が結成された。この委員会で実際の作業を行うように任命されたユダヤ人医師（自らも甥二人を事件で失っている）アスカレッリの努力によって、335名中、324名の名前が明らかにされた¹⁵。「報復」としての虐殺は、「24時間以内」に遂行されねばならなかったために、たいへんな混乱のなかで隠蔽されたので、すべての犠牲者の名前が明らかにならなかったのがあった。ドイツ軍によって、「報復」を引き起こした「原因」と位置づけられたラゼッラ通りの襲撃と、その後の「報復」プロセスを、このアメリカ軍作成の資料や裁判資料、新聞等から詳細に再構成したのが、ロバート・カッツである。これによって、ラゼッラ通りとフォッセ・アルデアティーネのふたつの事件の具体的な推移の骨子が明らかにされた。解放戦争の戦死者の遺族からなる互助・支援団体 Anfim (Associazione Nazionale Famiglie Italiane Martiri, イタリア人殉難者家族会) も、書籍・ビデオ等を作成している。

ラゼッラ通りの襲撃に関しては、襲撃の当事者であったベンティヴェーニャの著書があり¹⁶、フォッセ・アルデアティーネの虐殺の指揮をとったカブラーやプリーブケの裁判の際に彼らの戦後の人生や裁判の経緯などがまとめられたものが出版されている¹⁷。

今日の歴史的・政治的修正主義、あるいは「忘却と和解」を要求する議論は、当然フォッセ・アルデアティーネに関する研究にも大きな影を落としている。虐殺が遂行される前に、ラゼッラ通りの襲撃を実行した GAP メンバーに対して出頭の呼びかけがあったという根拠のない主張、あるいは、そのような勧告は存在しなかったという歴史的な事実を確認しつつ、その上でなお、ラゼッラ通りの襲撃が、フォッセ・アルデアティーネの虐殺を招くことは、パルチザンにとって明らかであったはずである、ないし、襲撃の「目的」は、報復を「そそのかす」ことであったと主張する研究書が、次々と出版されて

¹⁶ Rosario Bentivegna e C. De Simone, *Operazione via Rasella. Verità e menzogne: i protagonisti raccontano*. Roma, Riuniti, 1996.

¹⁷ Guido Gerosa, *Il caso Kappler. Dalle Ardeatine a Soltau*. Milano, Sonzogno, 1977; Robert Katz, *Dossier Priebeke. Anatomia di un processo*. Milano, Rizzoli, 1997 など。フォッセ・アルデアティーネの虐殺の実行者であったドイツ軍の該当者の責任追及は以下の通り。SS 中佐でゲシュタポのローマ本部長であったヘルベルト・カブラーは戦後、15 名（命令によって行った 320 名の「報復」より多かった人数）の殺人により終身刑となったが、病氣のためドイツに帰国、1978 年に死亡した。カブラーの部下エーリッヒ・プリーブケはアルゼンチンへ逃亡していたが 1994 年にアメリカのジャーナリストのインタビューを受けたことで発見され、95 年にイタリアへ引き渡された。フォッセ・アルデアティーネの件で戦争犯罪の罪に問われ、97 年、高齢のせいもあって、10 年の刑が確定した。イタリア戦線最高司令官であったアルベルト・ケッセルリンクはフォッセ・アルデアティーネの虐殺に関して連合国法廷で戦争犯罪の罪に問われ、1946 年に死刑が確定したがその後終身刑に減刑、52 年に健康上の理由により帰国が許され、60 年に死亡した。

pp.43-46 (堤康徳訳『反ファシズムの危機 現代イタリアの修正主義』岩波書店、2006 年、62～65 ページ)。

¹⁵ Attilio Ascarelli, *Le Fosse Ardeatine*. Roma, Palombi, 1945. Katz, op.cit., pp.203-205, 河島前掲書、173 ページ。

いる¹⁸。

このような、フォッセ・アルデアティーネの出来事と、ラゼッラ通りの出来事を、「作用と反作用、陰謀と報復、罪と罰という恐るべき対称」へと還元しようとする語りに対して、膨大な「複数の声」を収集することによって抵抗するのが、アレッサンドロ・ポルテッリの『命令はすでに遂行された』である。ポルテッリが、レジスタンスや虐殺された市民の遺族らの証言にこだわるのは、無関係の市民の虐殺の責任をパルチザンに転嫁しようとする意図的な単純化を批判するためである。しかもそうした単純化は、レジスタンスによる自力解放というある意味での「勝者の歴史」に対する対抗的な語りを装いながら、先述したベルルスコーニのように、社会的弱者とはまったく言えない大規模メディアや権力の力によって流通させられている¹⁹。彼は、現在記念施設となっているフォッセ・アルデアティーネを参拝していたある女性との対話²⁰や、あるいは学生たちとの対話を通じて²¹、レジスタンス運動を相対化し、レジスタンスに対してフォッセ・アルデアティーネの責任を求める感覚、あるいは、事件についての認識がほとんど継承されていない状況を明らかにし、メディア

を通じて喧伝される対抗的な語りが、非常に強い力で、一般の感覚のなかに浸透していることに、危機感を抱いている²²。

2. 犠牲者たち

(1) フォッセ・アルデアティーネ事件の経過

ラゼッラ通りの襲撃直後、ドイツ兵の死者は28名であった。ドイツ軍ローマ司令官のメルツァーは、SS中佐および秘密警察（ゲシュタポ）ローマ本部長のカプラーに、「報復」の任務を託した。カプラーの仕事は、殺害されたSS隊員1名につき10名のイタリア人を殺害するために²³、280名の「死の候補者」²⁴のリストを作成すること、それを24時間以内に実行するという命令を遂行することであった²⁵。カプラーは、死刑囚や終身刑、長期の刑を宣告された者、スパイなどの反ファシスト行為の容疑で市内タッソ通りの秘密警察監獄や市内のレジーナ・チェーリ刑務所のドイツ軍棟にいる囚人に、ユダヤ人であるという理由で強制送還を待っている者57名、ラゼッラ通り周辺で逮捕された、襲撃とはまったく無関係な民間人（ラゼッラ通りと交差するクアットロ・フォンターネ通りで商店を営んで

¹⁸ Giorgio Pisanò, *Sangue chiama sangue*. Milano, C.D.L., 1994; Pierangelo Maurizio, *Via Rasella, cinquant'anni di menzogne*. Roma, Maurizio, 1996; Joachim Staron, *Fosse Ardeatine e Marzabotto*. Bologna, Il Mulino, 2007 [Edizione originale: *Fosse Ardeatine und Marzabotto: Deutsche Kriegsverbrechen und Resistenza; Geschichte und nationale Mythenbildung in Deutschland und Italien*. Paderborn, Schöningh, 2002]など。

¹⁹ Portelli, op.cit., p.5.

²⁰ Ibid., p.6.

²¹ Ibid., p.362 et al.

²² 日本における研究としては、先に挙げた河島英昭のエッセイや、岡田全弘『イタリア・パルティザン群像』（現代書館、2005年）、また、ドイツとイタリアおよび日本の戦争責任の取り方を比較した、高橋進「記憶と歴史学——ファシズム、レジスタンス、戦争犯罪——」（『龍谷法学』Vol.38, No.3）が、戦後の「記憶」の抗争との関連も含めて簡潔に記している。

²³ ラゼッラ通りの襲撃事件の一報を受けたヒトラーは、SS隊員1名につき30～50名のイタリア人の殺害を命じようとしたという。Katz, op.cit., p.78.

²⁴ Ibid., p.81.

²⁵ Ibid., p.96.

いた者など) 10 名、連合軍のスパイ等の名を加えて、リストを作成していった。この間にドイツ軍の死者は 28 名から 32 名に増えた。3 月 24 日明け方までに、カプラーは 270 名のリストを完成させた。残る 50 名は、ファシスト、つまりイタリア側によって用意された²⁶。

320 名の処刑の指揮は、襲撃されたボーツェン大隊に命じられたが、隊長がこれを拒否したために「彼は復讐したいとはまったく思っておらず、おそらく、フューラーの命令の正統性も信じていなかった」²⁷、カプラー自身が引き受けなければならなかった。24 時間以内に実行するために迅速に、また、虐殺が明らかになってローマ市民の反抗を招かないために秘密裏に、処刑は行われなければならなかった。このために、ローマ時代のキリスト教徒の地下墓地カタコンベが広がる郊外の、土砂を採掘した後の洞窟が選ばれた。

死者がもう一名増えたとの情報から (実際には 32 名であった)、最終的に、330 名のリストが作成された。24 日の午後 2 時ごろから、これらの人々はトラックに詰め込まれてフォッセ・アルデアティーネまで輸送され、SS のエーリッヒ・プリーブケ大尉ら 74 名のドイツ兵によって、5 人一組にされて、次々と銃殺された。処刑は

夜 8 時まで続いた。プリーブケはカプラーに、335 名が処刑されたことを報告した。手違いで、5 名多く殺されてしまったのであった²⁸。処刑の終了後、洞窟は爆破されて埋められた。

(2) 犠牲者たち

戦後の調査で氏名が明らかになった人々は、職業も年齢もさまざまであった。警察官 1 名、行商人 16 名、建築士・技術者 5 名、俳優 2 名、弁護士 11 名、薬剤師・医師 4 名、軍人 38 名、公務員 4 名、事務系労働者 49 名、肉体労働者 30 名、農民、司祭、学生……。年齢は、判明しているかぎりではもっとも若い者が 15 歳、最高齢は 74 歳。イタリア人だけではなく、ベルギー人 1 名、フランス人 1 名、ドイツ人 1 名、ハンガリー人 1 名、リビア人 1 名、ロシア人 3 名、トルコ人 1 名が含まれていた²⁹。最近の研究では、ユダヤ系市民は 75 (または 76) 名とされている。ユダヤ系であるという理由だけで収監され、リストに加えられて処刑された人々、SS に対する襲撃には何の関わりもなかったにもかかわらず、ラゼッラ通り周辺で逮捕された人々の他、タッソ通りの監獄やレジーナ・チェーリ刑務所から連行された人々のなかには、多数のバルチザン兵士や指導者、反ファシズム活動家が含まれていた³⁰。フォッセ・アルデアティーネの

²⁶ このときリストに一旦は加えられたが、50 名という人数に合わせるために名前を消された 8 人のユダヤ人に関する、ジャーコモ・デベネデッティの文章は、フォッセ・アルデアティーネ事件に関してもっとも早い時期に書かれた記録のひとつである。Giacomo Debenedetti, *Otto ebrei* (1944), ora in *16 ottobre 1973*. Torino, Einaudi, 2001.

²⁷ Katz, op.cit., p.115.

²⁸ 事件の経緯については、Katz, op.cit., pp.107-152 および河島前掲書 156~172 ページを参照した。

²⁹ Katz, op.cit., pp.152-153.

³⁰ Portelli, op.cit., pp.176-182. こうした人々の逮捕と処刑 (フォッセ・アルデアティーネに連行される以前にも、多くの人々が拷問

犠牲者たちのさまざまなアイデンティティには、多様な世代、多様な所属をもつ人々が、おそらくは多様な方法で、占領軍に対する解放運動にかかわりをもっていたことが示されている。

3. 記念碑、記念すること

(1) 追悼施設の建設

アルデアティーネ通りを通してローマ市街を出、サン・カリストのカタコンベを過ぎると、その追悼墓地は、大きなブロンズの、植物の絡み合ったようなデザインの大門（ミルコ・バザルデッラのデザイン）によって、その存在を知らせる。印象的な生命力をたたえてもつれあった抽象的なデザインの扉は、そこが、ただならぬ場所であることを告げている。周囲を囲む壁の上では、老人と、壮年の男性と、若者とがいつしよに手をつながれている集団像（フランチェスコ・コッチャ「三代」）が、カプラーの兵士たちが、あらゆる境遇、年齢、社会層に属する男たち（犠牲者に女性はいなかった）を、首筋への銃の一撃によって処刑するために洞窟に連行した、その瞬間を証言している。敷居をまたぐと、環状の理念的な進路が、霊廟を構成するふたつの部分を結んでいる。凝灰岩にうがたれた、

虐殺が行われた坑道と、336 の平等な墓が並ぶ墓地（ひとつは解放戦争におけるすべての死者に捧げられている）が、痛みを静かに示す構図のなかで、1944 年 3 月 24 日の午後に失われた命を再構成している³¹。

追悼墓地の建設は、遺族の意向もあって、国民解放委員会とバドリヨに代わって首相となったボノミーによって形成された新政府によって、44 年秋という連合軍によるローマ解放後間もない時期に発案された。45 年 1 月に発表された記念碑の設計計画の公募は、解放後初めて開催されたコンクールとなった。北部イタリアの解放（イタリア全土の完全解放）が 45 年 4 月 25 日だから、その早さは驚くべきものであり、そのために、この記念碑の創設に際して想像されるさまざまな衝突に出会わずにこの計画の実現が可能になったのかもしれない。遺体の発掘の後、爆破の影響でいつ崩壊してもおかしくない状態だった事件の現場となった坑道を保存し、死者を記念する施設が建設されることとなった。

最初の選考では 12 案から 4 案が選ばれ、第二選考で 2 案に絞られる。2 案はどちらも、「戦没者墓地に想を得て」、坑道の外の広場に、小高く、板状の墓碑をつくる構想であったが、遺族が洞窟の外部に墓地をつくることに反対した。2 案

と処刑によって死亡していた）によって、レジスタンス組織は混乱し、活動を縮小することを余儀なくされた。

³¹ Francesca Romana Castelli, 'Un monumento diventato simbolo' in *Capitulum millennio*, n.21, marzo-aprile, 2001, p.76（掲載記事は http://w3.uniroma1.it/qart/QART_cap2.html で読むことができる）。追悼施設の外観は巻末図を参照されたい。

が協力して作成した最終案では、これを考慮し、埋葬場所は一ヶ所に集められ、地面の外ではあるものの、やや掘り込んで設置され、石の屋根をつけた、地下のカタコンベのような巨大な石棺とし、坑道からも広場からも接近できるようにした³²。1947年11月にすべての遺族の合意によって施設の建設は始まり、2年後、虐殺から5周年の記念日に落成式が行われた。この場所では今日まで毎年3月24日に、記念式典が行われている。

(2) 死者を記念する

ポルテッリの収集している、遺族や当時を知るローマ市民の証言は、記念施設ができる前、まだ遺体がすべて発掘される以前の、死の臭いと吊いの花束に満ちたままの頃にすでにこの場所が、巡礼の場となっていたこと、その、まだ組織化されていない死が、生々しく、ローマ市民に動揺を与えていたことを示している。「過剰」で、「偶発的な」死は「慈悲ではなく嫌悪を呼び起こす」。事件の直後から、この動揺に対して、ローマ市民の間には二つの性急な反応があったことをポルテッリは指摘している。その第一は、パルチザンに対して責任を負わせること、第二は、殺害された人々を、単一のカテゴリー——「すべてユダヤ人であった」「すべて共産主義者であった」「すべて犯罪者であった」——に

押し込めようとするものである³³。いずれも、死の理由を同定しようという虚しい努力であり、それは、遺族をもっとも悩ませつづける問題でもある。ある遺族はこう述べる。「[パルチザンに責任を求めるのは] 本能的なものです……はらわたの反応とでも言いますか。しかし私たちは、はらわたの存在であると同時に脳の存在でもあります。初めに、「パルチザンが爆弾を置いた。それが原因で……」と言われ、「オッセルヴァトーレ・ロマーノ」紙のような疑いのない情報源も、パルチザンとドイツ軍の反応を同じレベルに置いた……まったく、情報不足のなせる業でした。私も恨みに思いました。それから、そのことをよく考えてみたのです……」³⁴。

追悼施設は、突然の死を承認することの困難さに対して、どのように向かい合っただろうか。追悼施設における記念式典についての、遺族の記憶は、「赤旗」で埋め尽くされているようである。しかし、式典の公式の主催者は、キリスト教民主党政府であったので、式典はミサをとまなう厳かなものであった。死者は殉教者のように扱われ、個々人の所属や名前がばかされた。その傾向は、反共産主義的であった。すなわち、ひとつの儀礼のなかに、ふたつの空間があったのである。式典の舞台上では、穏健な中道右派が、体制の正統性を主張し、会場の広場では、左派が自らを民衆運動としてのレジスタンスの

³² Adachiara Zevi, *Fosse Ardeatine*. Torino, Test & Immagine, 2000, p.20.

³³ Portelli, *op.cit.*, p.285. 収録された証言は、1997～98年に収集された。翌1999年に同書の初版が再行される。

³⁴ Ibid., p.297.

主役と主張していた。それ自体が、「レジスタンスから生まれた」共和国の公共空間と、そこに存在する困難のメタファーになっていた。ふたつの空間は「どちらも、単一的で愛国的な運動としてのレジスタンス、戦死者であり犠牲者としてのパルチザンという表象の上に立脚している。殉難者＝「パルチザン」というイメージは、パルチザン＝殉難者というイメージに補完されて可能になった」。

こうしてフォッセ・アルデアティーネは、国民的なモニュメントになる。国民の単一性をあらわすためには、多様性と対立を消し去らなければならない³⁵。

左右どちらの形式をとるにせよ、英雄に対する公式の記念は、私的で親密な追悼を抑圧することを意味した。「公的な儀式、軍隊のあれこれ、墓、従軍司祭たち、それに仰々しい演説」が死者を奪う。「何か不自然な、大げさなものがありました。私は母に腹を立てたものです。「私は馬鹿みたいに感じるためにここに来たんじゃない。私はお父さんに会いに来たの、それから彼ら〔死者たち〕と話して、彼らから学ぶために……」」。遺族の中には、遺体をフォッセ・アルデアティーネから親族の墓地へ埋葬しなおした人々さえあった。文字通り、死者を取り戻そうとしたと言

えるだろう³⁶。

フォッセ・アルデアティーネの虐殺を記念する 2006 年の式典において、イタリア共和国第 10 代大統領でレジスタンス運動の闘士でもあったチャンピは、間もなく選挙で激突する左右のリーダー、ロマーノ・プローディとシルヴィオ・ベルルスコーニに、選挙戦のトーンを抑えるように呼びかけた。この呼びかけ自体は、来るべき選挙における両陣営（とりわけ右派）の戦いが民主的な、相互に敬意を払うものであれという内容だが³⁷、その発言がフォッセ・アルデアティーネで発された時、この場が「国民の単一性」を象徴する空間であること、その「単一性」をめぐる 10 年来の議論がなされていることが意識されなかったはずはない。けれどもそこには、フォッセ・アルデアティーネで殺害された人々やそれらの人々を私的に悼む人々はいない。ある場所が、共同体の（この場合は「イタリア国民」の）統一性を象徴することを担わされるということは、すなわち、その共同体に、容易に統合できないもの、不一致なものがあるということであろう。その意味で、追悼施設が建設されたとき以来、そこはつねに、政治の場である。

4. 語りを混乱させるもの

³⁶ Ibid, p317.

³⁷ 「ラ・レプブリカ」、2006 年 3 月 24 日付記事。チャンピ大統領はイタリアの解放における民衆的レジスタンスの意義の擁護にも熱心であった。秦泉寺前掲論文を参照。

³⁵ Ibid, pp313-314.

(1) 事件の理解の問題点

ここで、今日のフォッセ・アルデアティーネについての語りをめぐる問題を整理したい。

第一に、歴史叙述における歴史的事実のレベルの問題である。その焦点は、すでに幾度も述べたように、1944年3月24日に発生した、ローマ市郊外のフォッセ・アルデアティーネにおける、335名のイタリア国民のドイツ軍SSによる処刑と、前日3月23日に行われた、レジスタンスの闘士であったGAPメンバーによる、ローマ市内ラゼッラ通りにおけるドイツ軍への襲撃(ドイツ人兵士の死者は最終的に32名であった)というふたつの事件に関連づけて考えるかどうか——「報復」は予測可能であったか、それが可能であったならパルチザンに対して「報復」の責任を問うことができるかなど——である。44年3月25日に発表されたドイツ軍のコミュニケ、翌日の「オッセルヴァトーレ・ロマーノ」紙の論説、90年代以降の修正主義の主張は、「報復」が事前に宣言され、それを避けるために襲撃の犯人に降伏を呼びかける勧告があったという事実でない主張を除くとしても、①パルチザンは、ドイツ軍による「報復」が予想できたにもかかわらず、ラゼッラ通りの襲撃を決定した、②パルチザンは無実の人々を犠牲にしないために自首するべきであった、というものである³⁸。しかし、「報復」がこれほど迅速に、

SSに対する前日の襲撃とはまったく無関係の人々に対して遂行されることが、予測できたとは言えず、したがって、そのことについて、パルチザンたちが出頭することは不可能であっただろう。「イル・ジョルナーレ」紙上で主張され、破毀院によって否定されたいくつかの歴史的事実(民間人死者の数、襲撃されたボーツェン大隊の構成員の国籍等)も、この問題の一端である。こうした歴史的事実に関する議論は、ラゼッラ通りの襲撃の当事者である元パルチザンたちや、良心的な研究、先に見た破毀院の判決のような公式の見解でも、その都度訂正される。

しかし、レジスタンスに虐殺の責任を負わせる主張へと結実する議論は、こうした事実関係の問題を超えた力をもっている。カプラー、ブリーブケらフォッセ・アルデアティーネ事件の関係者の諸裁判や、パルチザン自身に対して起こされた裁判を通じて、レジスタンスの責任は明確に否定され、遺族も「脳では」それを理解している。にもかかわらず、人々の間にこの感情は根強く生き残っている。これが、フォッセ・アルデアティーネについての語りをめぐる問題の第二点である。こうした主張が生き続ける背景には、70年代から行なわれてきたファシズム期の再評価や、90年代の政治的転換にともなう

³⁸ たとえば、ベルルスコーニとともに中道右派連合を担って94年の選挙に勝利した国民同盟党首、ジャンフランコ・フィーニはボルテッリのインタビューに対して、次のように述べている。

「(パルチザンの行為は正当な戦争行為であったと認められていることについて) イタリア社会共和国をつくった、最後までファシストであった老人たちにも、戦争行為は正当な行為だと考えられていた。卑劣であると考えられたのは、姿を現さなかったことだ。報復の要求は広く予想されていたのだから、その結果は誰の目にも明らかだったのに」。Portelli, op.cit., p.7.

歴史修正主義の噴出などがあるだろう。そして、メディアを使って喧伝されるこうした主張を³⁹、ほとんどそれだけを情報源として、事件の記憶として受け止める人々もある⁴⁰。フォッセ・アルデアティーネの虐殺の責任を誰かに・何かに求めようとするのは、どのような要求だろうか。それは、犠牲者たちの死の理由を求める欲求である。追悼施設の建設、記念式典、修正主義の議論などは、いずれも、突然で過剰な死の理由を確定しようとする行為であると言えよう。説明しようとすることは、「大量虐殺の忌まわしさを清める、あるいは少なくとも衝撃を和らげる」⁴¹ことである。だからそうした行為は、つねに事件自体の部分的な忘却をとまなうのかもしれない。

(2)なぜ「理由」が必要なのか

しかし、説明はつねに、真実を、意図的にかつかみ損ね、少しずつずれていくように見える。

①人々は、ラゼッラ通りにおけるパルチザンによる襲撃に対する「報復」の犠牲者であったという説明。しかし、そもそもドイツ軍が「報復」の対象としたのは、パルチザンではない。コミュニケによれば、攻撃を遂行したのは、「バドリヨ派の共産主義者たち *comunisti badogliani*」なので、それが「報復」の対象とされる。「報復」

の対象は、攻撃の遂行者でないだけでなく、レジスタンス運動への参加者ですらない、ファシスト以外のイタリア国民全体へと拡大されている。より事実在即して言えば、ドイツにとっては裏切り者であるバドリヨ体制を、共産主義者と呼んでいることはレトリックの問題だと考えとしても、バドリヨはこのとき、首都ローマと市民の防衛を放棄して逃亡している。反ファシスト行為でレジナ・チェーリ刑務所やタッソ通りの監獄に収監されていた人々も、それ以外の、偶発的に選ばれた人々も、「バドリヨ派」とは呼び難いであろう。②パルチザンは攻撃の後、自己の保身のために、自首しなかったという説明。しかし、「報復」が市民の虐殺という衝撃的な形で行なわれたことが報道された翌日、攻撃の当事者であった GAP は、奇襲作戦を取行したのは自分たちであり、「無実の 320 名虐殺」に屈することなく、独立と自由をかちとるまで攻撃を続けるという声明を発表した⁴²。③犠牲者たちはなぜ犠牲者として選ばれたのか。先述のように、事件の直後から、犠牲者を単独のカテゴリーにくくろうとする傾向はあったが、犠牲者の職業、年齢、社会的地位、宗教、国籍すら、全員に共通する要素はない。④犠牲者たちは全員「パルチザン」の死者として記念されるか。犠牲者には反ファシスト行為の容疑で逮捕・拘禁されていた人々が多く含まれるが、パルチザンとして組織的な活動に参加してはい

³⁹ マスメディアを使った宣伝は、90年代の歴史修正主義の特徴でもある。岩崎／リヒター前掲論文、379～380ページ。

⁴⁰ Portelli, *op.cit.*, pp.373-376.

⁴¹ *Ibid.*, p.377.

⁴² 河島前掲書、181ページ。

なかった人々もいた……。

事件についてのいずれの理解も、真実の一部を物語っているかもしれないが、事実のすべてを説明することはできない。それは、政治的な意図をもって敢えて単純化を図ろうとするという以上のことを示しているように思われる。だとすれば、なぜ、「理由」が必要とされるのか、を問うべきであろう。突然に身近な人間を奪われた遺族が犠牲者の死の理由を求めることは、自然な衝動であると言ってもよいだろう。しかし事件は、ローマ市民にも大きな影響を与え、今日ではより大きな規模の問題となっている。ある意味では、「国民的」規模と言えるようにも思われる。それは、フォッセ・アルデアティーネが、あらかじめ構築されていた国民の経験であるからではない（それは事件の経緯と背景を見れば明らかである）。事件をめぐる、死の理由を求める議論が行われつづけるのは、理由が確定されないことに居心地の悪さを覚える、ある一定の規模の人々がいるからである。フォッセ・アルデアティーネが、逆説的に、事件にも、犠牲者にも、直接的な関わりがないにもかかわらず、事件を歴史上の出来事として簡単に整理することもできず、自分とは無関係であると完全に忘却することもできない人々の間に、共同性を喚起しているかのようである。そしてその共同性は、追悼施設に象徴されるような、単一的な「国民」ではない。事件をひとつの通過点とする時間軸を、さまざまな異なる経験のもとで

生きてきた人々の間に醸成された、「英雄」や「犠牲者」の神話によっても、「分裂した民族」の言説によっても説明できないものではないのだろうか。

この問いに、今十分に答えることはできないが、修正主義論争の大きな焦点のひとつとなっている「グレーゾーン」の問題とも関わっているように思われる。ルッツァット『反ファシズムの危機』日本語訳に付された解説で、北原敦はこれに関して、次のように指摘している。「グレーゾーン」という概念は、アウシュヴィッツから生還した作家ブリーモ・レーヴィが『溺れる者と救われる者』という著作のなかで、絶滅収容所内部の、主人と奴隷の二つの領域を分けると同時にそれを結びつける、境界のはっきりしない領域を指すために用いた語である⁴³。そこは、加害者と被害者とを単純には区別できない、「複雑で判断を下しにくい領域だと、重い意味をこめて使ったのだが、デ＝フェリーチェは、グレーゾーンをごく平板化して、事件に積極的にかかわらずに、未来を受身の姿勢で待機する領域として設定したのである」⁴⁴。だが、フォッセ・アルデアティーネの記憶の前に動揺する人々は、デ＝フェリーチェが単純化した、「グレーゾーン」に自らを置くことができずに、居心地の悪さを感じているように見える。その苛立ちのようなものこそが、フォッセ・アルデアティ

⁴³ Primo Levi, *I sommersi e i salvati*, Torino, Einaudi, 1986.

⁴⁴ 北原敦「解説」ルッツァット前掲書、153 ページ。

ーネをめぐる繰り返される、パルチザン責任論に代表されるような単純化の議論を根強く生き続けさせる土壌となっているのではないだろうか。

おわりに

周囲を取り囲むように点在するカタコンベ群の一部であるような、要塞のように堅固な高い壁に対して相対的に小さなブロンズの門の、さらに小さな切込みをくぐり、目の前に広がる広場を抜けて、薄暗い静かな坑道に入る。壁と天井の補強された道を通して向かう最深部には、入ってきた門とよく似たデザインの格子（大門と同じデザイナー）が置かれ、傍らには、60年以上前にここで起こった出来事が記されたブロンズ板が嵌められている。すでにすべて発掘されたとはいえ、目の前の闇の向こうで、335人もの人間が、抵抗することも許されずに次々と処刑され、山積みになされていったことを思い出すと、慄然とする。坑道はそこから回廊のように、ひとつの巨大な石棺のような共同墓地へ向かう。地面と巨大な石の蓋のあいだの細い隙間から差し込みだけの、暗い墓地に、同じ大きさで、名前と年齢と職業が刻まれた墓石が並ぶ。花が手向けられた墓石もある。オテッロ・ヴァレサーニ、19歳、靴職人……カルロ・ザッカニーニ、30歳、弁護士……氏名不詳、氏名不詳……。336の墓碑の並ぶ整然としたありさまが、かえって不穏さを醸し出す。335人の死者は、

偶発的に選択されたという意味において平等であるが、同時にその切りつづめられた死は、ひとつひとつ個別の死であることを、無言で訴えつづけている。その声は、墓地を出て、明るい白い広場へ戻っても、まとわりつく薄暗さと肌寒さとして、忘れ去ることを許さない。当事者ならずとも感じるこの感覚は、この出来事——事件の発端となった「テロリズム」だけでなく、事件の経験や、事件をめぐる語りを含む総体としての——を歴史化することの困難さに由来するのかもしれない。

フォッセ・アルデアティーネは、戦後イタリア社会が、必死で塗りこめようとしてきた、共同体の、政治的・社会的・歴史的不一致（亀裂や抗争ではなく）を、その存在それ自体をもって呼び起こしつづける。おそらくどのような共同体も、同様の不一致を抱え、それを扱いかねて、さまざまな言論を繰り返すだろう。フォッセ・アルデアティーネは、ひとつの共同体にただひとつの記憶を選択し、ただひとつの現在を課しようとする強制力に抵抗する反記憶の場所のひとつでありつづけるといってもいいだろうか。

（おだわら りん・東京外国語大学海外事情研究所非常勤研究員）



図1 坑道への入り口



図2 彫像



図3 墓地